

バングラデシュ南部避難民救援事業（第5班 事務管理要員兼技術要員）

国際医療救援部 国内救援課 主事 仁田涼子

（派遣期間：2018年2月16日～2018年3月22日）

2017年8月25日以降、ミャンマーからバングラデシュ南部に流入した避難民は、ISCGレポートによると、2018年3月11日現在67,100人にのぼっている。日本赤十字社（以下、日赤）は2017年9月中旬から継続して緊急救援チーム（以下、ERU）を派遣し、医療支援を行っており、当院からも医師、看護師、薬剤師、事務管理要員、技術要員と多くの職員が派遣されている。今回私は第5班の事務管理要員兼技術要員として2018年2月18日から2018年3月20日までバングラデシュコックスバザールで活動を行ったので報告する。

～事務管理要員として～

事務管理要員の仕事は、医療従事者が医療活動に専念できるよう、労働環境を整えることと研修で学んだように、実に多岐に渡っている。お金（前渡金）の管理、現地スタッフの労務管理、広報活動、要員の移動・宿泊・スケジュール等の管理、業務で使う資機材の調達・購入、車両の調整・管理、運転手の管理、通信の管理、資機材管理等、医療活動以外の仕事は全てと言って過言ではない。私は今回この中でも、「車両の調整」、「車両・運転手の管理」を中心に担当した。

ERU第5班は、日赤要員総勢述べ26名、バングラデシュ赤新月社（以下、バ赤）要員15名からなり、管理する車両は9台とこの事業の中でも最大規模であった。毎日誰がいつどこで活動するのかを把握し、車両9台に適切に振り分け、誰一人取り残すことなく全員が無事一日の活動を終えることで私の任務が終了する。日本にいと、一人ぐらい取り残してもまた迎えに行けば問題ないが、セキュリティーが不安定な現地で活動地に一人でも取り残してしまえば命にかかわってしまう。とても責任のある仕事であった。さらに日赤要員の宿泊地がベースキャンプに移動してからは、車両の調整はパズルのように複雑になった。同時に運転手にもベースキャンプに宿泊してもらわなければならない、チームリーダーやヘッドアドミニに協力してもらい、運転手に説明を行い、シフト表を作成した。シフトを作成するにあたっては、運転手に安全運転をしてもらえるように彼らが適切に休めるよう休日調整を行ったり、不満が出ないようにベースキャンプ泊数を同じ数にしたりするよう心がけた。幸い任務中、交通事故もトラブルもなく要員全員が無事に移動すること

ができ、ホッとしている。

一方バ赤要員については、日赤要員がベースキャンプに移動してからは、バ赤要員だけでコックスバザール市内から活動地を往復する必要が生じたため、バ赤事務管理要員を中心に彼ら自身で責任を持って移動できるよう、業務移行を行った。



フリート表の作成



運転手と打ち合わせ



バ赤要員とフリートの確認



患者搬送で活躍したトムトム

～技術要員として～

ERU 第 5 班の技術要員は、日赤要員 3 名、コミュニティーボランティア（ローカルスタッフ）2 名で活動を行った。4 月中旬から始まるであろう雨季に備えた対策、ERU 活動縮小へ向けてコミュニティーボランティアへの業務移行や資機材のインベントリー作成、私を含め 2 名の新人技術要員の育成が主な活動であった。私は事務管理要員としての業務を一通り覚えてから、技術要員として活動を開始することになった。

仮設診療所では、雨季に対する備えとして地滑り対策が行われていた。スロープを階段状に加工したのち、土嚢と竹のフェンスを交互に配置するといったバングラデシュで伝統的な方法が採用された。私が技術要員として活動を開始した頃には、ほとんどの作業が終わっており、現地の方の作業能力の高さに圧巻させられた。

新人技術要員としては、日赤の先輩に一から丁寧な指導を受けると同時に、初期の頃から日赤と共に活動を行っているコミュニティーボランティアからもたくさんの技術や知識を教えてもらった。一緒に発電機の点検を行ったり、簡易担架の作成を行ったり国内救援活動で得た知識が役に立つこともあったが、日々学ぶことが多くもっと勉強しなければならないと痛感させられた。特に水質管理が一番難しく、飲料水にもなることからとても責任のある仕事で、やりがいを感じた。塩素濃度の調整は、なかなか安定せず WaSH の方から計算式を教えてもらい、みんなで何回も話し合った。

インベントリーは、仮設診療所、ホテル、チッタゴン倉庫、ウキア倉庫、ベースキャンプと保管場所が 5 か所に点在したことから、資機材の確認に時間を要した。



地滑り対策



コミュニティーボランティアと塩素濃度測定



WaSH チームとの話し合い



コミュニティボランティアと簡易担架作成

～最後に～

現地ではコミュニティボランティアはじめ、バ赤要員、そして日赤要員の人に助けられ、また日本では、不在中の業務をサポートしていただいた多くの職員の方に助けられ、私の初派遣は無事終わることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

現地の避難民キャンプでは、山を切り開いた斜面に、竹とビニールシートを使って建てられた簡易な家がたくさんあり、そこに今を生きている人がいます。ここにサイクロンが襲来したらと想像すると、彼らの今後の心配で仕方ありません。しかし、彼らはそこでたくましく生きています。そんな彼らのために、私たちにできることをこれからも継続して行っていかなくてはならないと強く感じさせられました。



避難民キャンプの様子



有事に備えて消火器訓練を実施